

## 他者の目を移植すること、そして自分の目が此处・東京にしかないことの知覚

秋山きらら

2021年度東京芸術祭の人材育成プログラム<東京芸術祭ファーム>の一つであるYoung Farmers Forum (YFF)に参加し、舞台芸術と社会と私の交点を考える時間を過ごすことができた。

YFFの活動は、東京芸術祭ファームの様々なプログラムに顔を出しながら国際協働の知見を深める設計であり、多様なバックグラウンドを持つアジアのアーティストによるAsian Performing Arts Campの完全オンラインでのリサーチから交流、クリエイションの過程を覗き見させてもらうことや、Farm-Lab Exhibitionの本番に向けてクリエイション現場・稽古をリアルで見学させてもらうこと、そしてYFFに参加している同世代のプレイヤーと一緒にレクチャーを聞き、毎回レポートし意見を交換することで構成されていた。

私自身はYFFの活動コア期間である10月後半からの本番日程に参加することができず、途中までの参加となってしまったが、それでも確かに手に残った感触を言葉にしていきたい。

毎回、場所（拠点）も違えば、言語も違う、性別も違う、オンラインやオンサイトでの距離感も違う、舞台芸術というベースはみんなが確かに共有しているけれど、その方法もバックグラウンドも考え方も結構違う場に「はじめまして」と出向いて行って、自分の居る方法をその都度微調整しながらプログラムに参加していた。

そして各活動後にアウトプットを投稿するのだが、一番はじめに投稿した私のアウトプットのタイトルには「今広い視野を持つということ」と書かれている。

「広い視野を持つ」というのは一見無条件に目指すべき方向のようであって、そのイメージは一つの目（視点）で、より遠くまでより多様なものを見られるようにする行為にすぎない、と今では思う。私はあの時この言葉を選んでいただけ、このYFFを通して、自分の目で全てを見渡そうとするのではなくて、他者から見た世界の見方を借りてきて世界を知ること（=移植すること）の面白さや、それでもなお移植先である自分の身体がどこにあるのかということからの影響がとても強いことを実感した。

顔合わせ以降次々に投稿されていくYFFメンバーのアウトプットを見ていて思ったのは、当たり前なことだけれど、その人がよく担っている役割や、今までのバックグラウンドや、これからのなりたい姿によって、同じ体験（オンラインで実施されたものは「本当に」同一のものだったろう）でも、全く異なる経験になり得ているということである。私は気にしないところを気にするメンバーがいて、反対に、私が言及したことを他メンバーが一言も触れていないときがある。レクチャーされたことや現場で起こっていたことの何を掴んで/手放して、どう紐付けていくかは本当にこんなにもバリ

エーションがあるのかということを感じながらメンバーのアウトプットを眺めていた。この雑多に溜まっていった日記のようなメモのような主観に溢れるアウトプットが、YFF活動の根幹であり貴重なアーカイブなのではと思っている。

一つの目で見える世界には限界がある。それよりも、他者が見ている世界 (=他者の目) を教えてもらうこと、いつでも想像できるようにすること、自分以外の視点があることを忘れずにいること。他者の目を移植することの重要性と面白さ。いつもこういう視点で思考している〇〇さんだったらどう言うだろうか、いつもこう言うところを気にかけてくれる〇〇さんだったらこれは怒るだろうか。自分も体験した同じ出来事に対しての、それぞれの視点・思考を短期間のうちに6人6様のバリエーションで共有してもらえたことで、そういった私の中の〇〇さんが増えている。

コミュニケーションデザインチームによるレクチャーでの気付きも、アジアのアーティストと英語を介したクリエイションが始まって、そこにあるのは想像し難かった他者の目の奥行きとバリエーションであって、そこから先は（決して他者の目を移植することが容易にできるようになったわけではないが）素直に他者から見えている世界を想像するという行為にアクセスしやすくなった。

なぜ今まで他者の視点に自覚的でなかったのか、それは今回多様な舞台芸術のプレイヤーが集まることができたというよりも、普段あまりにも同じような視点を持つ人たちのコミュニティの中でしか活動していないということだろう。視点が容易に共有できる人とのクリエイションは楽しい、自分の世界をどのように構築するかということに集中ができる、自我が強いクリエイションができる。でも、視点が容易に共有できない人とコラボレーションする時、諦めずに対話し距離を微細にはかりながら、他者の目を自らの身体に移植させる。責任を抱えつつも相手に明け渡す。そういったクリエイションにハマっていく人がこのプログラムには沢山いたように思う。

私が今回のYFFに応募した理由の一つに、同世代の舞台芸術に関わる人たちが今何を考えているのか話したい、その上で自分のキャリア、つまり（職能的に）どの視点を獲得していこうとすることを見定めたいということがあった。それは、今までの同質的なコミュニティ（それでも沢山の外部にアクセスしようとしている方ではあると思うが）や、定常的な活動から出歩いてみないと分からないとは思っていたが、メンバーのアウトプット一つとっても毎回の気づきがあったことは大きかった。

他者の目を移植するということは、言うが易いが難しい。「みんな違うよね」で終わることではないし、「知らなくてすみません」と謙虚の顔をした傲慢になることではない。そういったことを毎回の粘り強い対話や調整を通して、態度としてインストールされたと思う。知らないことを盾に使うことは意味がないし、その恥や後ろめたさを感じる時間があつたらその分知る努力をするべきなのだ。

一方、移植先である自分の身体がどこにあるのかということについて、最近、自分自身のリアルな軸足の置き位置というのが、こんなにも視点に関わってくるのだなという気付きを得ている。生まれも育ちも東京である私には、正直、拠点とか故郷、という概念がわからなかった。とても透明でフラットな感覚でいて、私は居処に対して特徴のない人間だと思っていた。

しかし、そうではない。地方から見ている人にはそうなりの視点・思考があるのと同様に、東京から見ている私はそうなりの特異点があったのだ。例えば選択肢が沢山あることや、既にあるパッケージ/方法の力が強くて困われがちなこと。詳細は省くが、それらは地方に住んでいる人と対話して自己の視点を相対化して初めて気付くことであり、大きな発見だった。

私は、一地方である東京からの視点しか持ち得ていないことを知覚した。

一方でオンラインでのコミュニケーションや移動によって、自分をここではないところに置いておくこともできるのではないかという確信が強まった。例えば、実際には京都に移動していても、東京の情報や人しか見ていなければ私の視点は東京にいるままだ。逆に、軽く右半身をどこか国外に置いておくこともできるのではないかと。

今回のYFFメンバーもそうだが、コロナ禍になり、地方に軸足を置くプレイヤーと近い距離感でやりとりをすることが増えたことで、場所（拠点）から否応なく刷り込まれ下支えされている視点があることに気付くことになった。軽いカルチャーショックである。自分のキャリアを考える上で、場所的にどの視点を獲得していこうとするのかを選べる、ということにそもそも気付いた。東京以外にも選択肢があるではないか。

「30歳まで舞台芸術に関われてきちゃった/これてきたという、その嗅覚とか、その継続の力量は活かして行って欲しい」ということを面談の際、多田ディレクターに言われたことが印象深い。既存のテンプレートで戦わずに、クリエイションの仕方から発表形態に至るまで、常に模索しているプレイヤーたちの姿を沢山見せてもらったYFFという経験を足掛かりにして、複数の目を持って境界を行き来できるプレイヤーになりたいと思う。数年先に振り返った時に、あの時は一つの目で全てを見ようとしていたな、なんて笑ってみたい。



秋山きらら（あきやま・きらら）

— 東京（日本）

1991年生まれ。コレオグラファー、コーディネーター。立教大学現代心理学部映像身体学科卒業。公演や展覧会の企画・制作に従事しながら、自身でも創作活動を行う。2016年に「身体企画ユニットヨハク」を立ち上げ、身体の動きを広く捉えた作品を発表。ダンサーの継続的な情報交換の場として2018年に発足した「ダンス井戸端会議」では中心メンバーとして活動するなど、アーティストをつなげる、サポートする活動も行う。

うごきずかん（身体企画ユニットヨハク）：

<http://ugokizukan.com/>

\*秋山きららさんは、都合により2021年10月中旬以降の活動を辞退しました。上記の最終レポートは、2021年7月～10月上旬までの活動に関するレポートです。